

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第196集

宮裏遺跡 IV

平成20年度 (主) 島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第196集として『宮裏遺跡Ⅳ』をここに刊行する。

宮裏遺跡は静岡県島田市阪本に所在し、大井川右岸の牧ノ原台地上に立地する。当遺跡周辺には、「延喜式」に記載される敬満神社が鎮座し、高根森古墳群や竹林寺廃寺など歴史に名を残す遺跡が数多く分布する。

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所は平成9年度から平成13年度、平成15・16年度、平成18年度にかけて、島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴い宮裏遺跡の発掘調査を実施してきた。これらの調査成果は、『中原遺跡 宮裏遺跡』『宮裏Ⅱ遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群』『宮裏遺跡Ⅲ』として報告書を刊行している。

今回の宮裏遺跡の調査では、牧ノ原台地上に展開する古代集落の様相を追加する資料を得た。今後は周辺遺跡の調査成果と併せて、精緻な分析が必要となる。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となることを願って止まない。

最後に、発掘調査ならびに本書の作成にあたり地元の皆様、静岡県島田土木事務所、島田市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。また、現地作業、資料整理に関わった作業員諸氏の労苦をねぎらいたい。

2008年10月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所 長 清水 哲

例 言

- 1 本書は静岡県島田市坂本に所在する宮裏遺跡Ⅳの発掘調査報告書である。
- 2 調査は、(主)島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 宮裏遺跡は過去3次にわたる発掘調査が実施されている。本書において報告する調査を4次調査とする。
- 4 調査体制は次の通りである。
所長兼常務理事 清水 智 次長兼調査課長 及川 司 次長兼事業係長 稲巻保幸 次長兼総務課長 大場正次
調査課事業担当 青井拓司 調査課中部調査係長 河合 修 調査研究員 井鍋啓之
- 5 現地調査は平成19年度に平塚智久・丸杉俊一郎が担当した。
- 6 本書の執筆は2章1、2を丸杉、それ以外の執筆、遺物写真撮影、編集は井鍋がおこなった。
- 7 本書で使用した座標値は、日本測地系(旧測地系)に準拠した。
- 8 地形図は「国土地理院二万五千分の一地形図」(平成8年発行)および「島田市二千五百分の一地形図」(平成2年発行)を複写・加筆して使用した。
- 9 発掘調査資料及び出土遺物は、静岡県教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

1章 序 論	1
1 調査経緯	1
2 遺跡の環境	2
2章 調査成果	3
1 調査概要	3
2 検出遺構	4
3 出土遺物	8
4 まとめ	9

図 版

報告書抄録

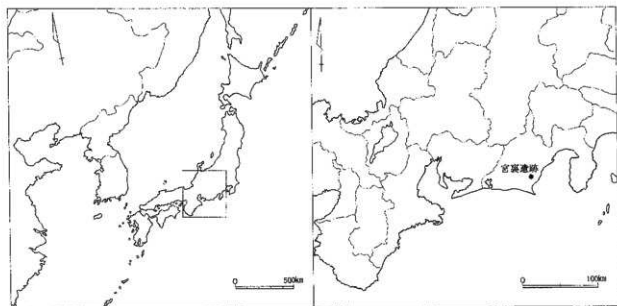


図1 宮裏遺跡の位置

1章

序論

宮裏遺跡は牧ノ原台地上に位置する集落遺跡である。過去、多くの発掘調査が行われ、奈良時代から平安時代の建物が多数検出されている。近隣の宮上遺跡群には「跡」と記された墨書土器や瓦、埴輪、円筒瓦が出土している。

1 調査経緯

宮裏遺跡は、静岡県島田市阪本に所在する。県道島田吉田線は、高度経済成長による住環境の変化・交通量の増加・東名高速道路吉田インターチェンジにより、交通集中に起因する慢性的な渋滞が生じるようになってきた。このような交通障害を解消する目的で計画されたのが、県道島田吉田線緊急地方道道路改築事業である。この路線は、島田市旭町から島田大橋を設置し、牧ノ原台地上を南東方向に縦断するものである。

牧ノ原台地上には旧石器時代から近世にいたるまで人為的活動の痕跡が残されている。県道島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う発掘調査は、島田市教育委員会により1980年代末以降、継続的に実施されている。特に宮上遺跡では「跡」と記された墨書土器が確認され、初倉驛家との関連が注目された。1990年代後半からは同事業用地内で財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘調査が実施され、中原遺跡、宮裏遺跡、高根森古墳群などが調査されている。中原・宮裏遺跡では古墳時代後期から平安時代の堅穴建物が多数検出された。これらの調査により、古代の牧ノ原台地上に展開した遺跡群の新たな知見が累積されてきている。

本書で報告する宮裏遺跡も同様の事業に伴い発掘調査対象となった遺跡である。2007年、道路改築事業は東海道新幹線線路高架橋を建設する段階に到達した。そして、1999年に調査が行われた宮裏遺跡3区北側が建設予定地として計画されたため、静岡県島田土木事務所との協議を経て、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施することとなった。

調査は、東海道新幹線高架橋建設工事用地を北半と南半に分割して行った。北半部は宮裏遺跡7-1区とし、成果はすでに報告されている(丸杉ほか2007a)。南半部は宮裏遺跡7-2区として設定し、宮裏遺跡7-2区は調査面積223㎡・調査期間は2007年5月14日～6月6日である。その後、工事用地が急速拡張されることが決定したため、拡張部分を宮裏遺跡7-3区とした。宮裏遺跡7-3区は調査面積90㎡・調査期間は2007年6月6日～6月22日にかけて実施した。

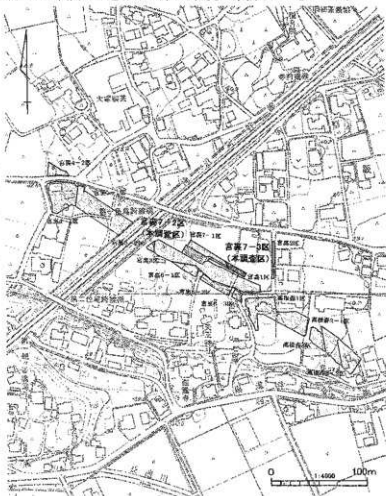


図2 調査地点の位置

2 遺跡の環境

宮裏遺跡をとりまく地理的環境 宮裏遺跡が所在する鳥田市は静岡県中西部に位置し、人口104,200人、面積315.9km² (2008年4月現在)の都市である。市内には大井川が北から南に流れ、平野に達するとやや東に向きを変えながら駿河湾に注いでいる。その下流域の右岸には牧ノ原台地が形成されている。牧ノ原台地は鳥田市金谷町北部から御前崎の先端までひろがる隆起状扇状地である。隆起状扇状地は大井川の堆積作用、隆起運動により形成され、地川には円礫が多く含まれる。台地面は南稜、東南稜、東稜の3つに分けられ、南、東方向に向かって低く傾斜している。宮裏遺跡は大井川と湯日川に挟まれた台地東稜の標高45m付近に立地する。

宮裏遺跡が所在する地区は「色尾礫層」が基盤をなしている。色尾礫層は大井川河川堆積物に由来し、その表層上に遺跡は立地する。

歴史的環境 台地上における人為的活動が認められるのは旧石器時代で、近隣では宮上遺跡、青木原遺跡が挙げられる。縄文時代は草創期から晩期にかけて遺跡が確認でき、中期は遺跡数が増加する。代表的なものとして宮裏遺跡より3km離れた東塚塚原遺跡では多角形住居が検出されている。縄文時代後期・晩期に入ると遺跡数は激減し、つづく弥生時代の遺跡にかんしては調査例が少なく詳細は不明である。

古墳時代の遺跡は台地面および傾斜地に分布し、横穴式石室を主体とする古墳が多く認められる。宮裏遺跡の北方1.5kmには愛宕塚古墳が存在する。愛宕塚古墳は6世紀中葉に築造され、上位階層に位置づけられる古墳である。このほか宮裏遺跡南側には高根森古墳群が存在する。現在までのところ10基の横穴式石室墳が確認されている。2号墳からは金銅製頭椎大刀、馬鐸、鏡などが出土しており、有力墳である。

律令期において当地では遠江国葵原郡に属する。宮上遺跡では「驛」と記された墨書上器、螺髻、丸瓦、青木原遺跡では円面鏡が出土しており、初倉驛家との関係が示唆されている。このほか、南側の台地面には奈良時代初頭に創建された竹林寺廃寺がある。南北162m、東西92mの区画内に金堂、講堂、塔が確認されている。古代において牧ノ原台地東端には政治・宗教的中心地が存在した可能性を指摘できる。



図3 周辺遺跡の分布

2 章

調査成果

今回の調査で検出された遺構は堅穴建物5軒、土坑墓、溝、小穴である。遺構の時期は大きく古代と近世に分けられる。堅穴建物は8・9世紀に帰属する。カマドの遺存状況は比較的良好で、煙道の長いカマドが目に見える。土坑墓、溝は近世以降であろう。

1 調査概要

調査地区の設定 宮裏遺跡における過去の調査区には調査回数ごとに連番が付されている。東海道新幹線高架橋建設工事用地が対象となる今回の調査区は7区である。7区は宮裏遺跡3区の北側に位置し、(勝又2002)7区の北半部は7-1区として、すでに報告されている(丸杉ほか2007a)。今回、本書で報告する調査区はその南半部である7-2区・拡張部の7-3区で、調査対象面積は313m²である。

基本層序 宮裏遺跡の層位はこれまでの成果と基本的に変わらないことから本報告では『中原遺跡 宮裏遺跡』の基本層位を踏襲した(勝又2002)。

I層は耕作土、II層は黒褐色土である。III層は暗茶褐色土であるが、II層との峻別は困難である。IV層は黄褐色土である。遺構は比較的明瞭で、検出作業はIV層上面で行った。牧ノ原台地上に分布する遺跡の大半がIV層上面において検出されている。IV層の下位は牧ノ原礫層および色尾礫層が広がる。

基本層位	層位名	宮裏II遺跡	特記事項
I	耕作土層	1	
II	黒褐色土層	2・3	遺物なし
III	暗茶褐色土層		遺物少ない
IV	黄褐色土層	4	上面遺構検出
V	礫層	5	牧ノ原礫層・色尾礫層

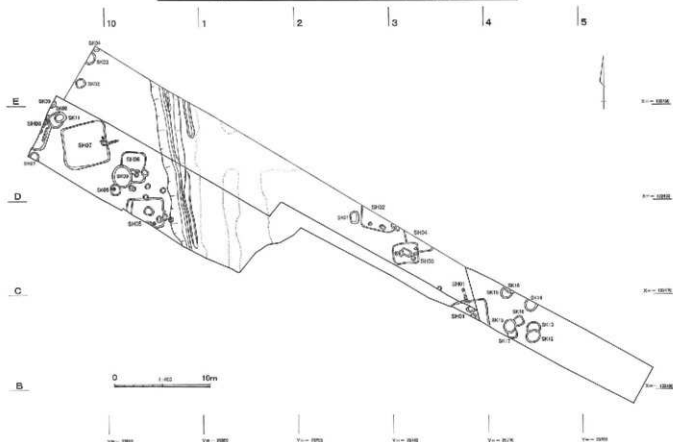


図4 検出遺構

2 検出遺構

概要 検出された遺構は竪穴建物5棟、土坑墓、溝、小穴であり、遺構の時期は大きく古代と近世に分けられる。竪穴建物は8・9世紀に帰属し、調査区西側の高位面・東側の低位面の双方に立地する。高位面に分布する建物は東辺にカマドがつくものが多く、低位面に分布する建物は東辺にカマドがつくものと北辺にカマドがつく建物がみられる。竪穴建物の規模は1辺4.5m台のものと1辺3m台のものがある。1辺4.5m台のものはほぼ隅丸の正方形をなし、1辺3m台のものはカマド位置により縦長と横長の長方形の形態がある。

宮裏遺跡では少なくとも7世紀末には竪穴建物を確認することができ、10世紀まで竪穴建物が存続する集落遺跡である。集落構成は掘立柱建物の比重は低く、ほとんどが竪穴建物で構成されている。宮裏遺跡の南に位置する高根森遺跡においても竪穴建物のみで構成されており、同じ様相を看取できよう。しかしながら、西遠江では8世紀後半に掘立柱建物を主体とした居住形態に変化することが指摘されており（佐野・齊藤ほか1997）、今回、確認された東遠江の宮裏遺跡は西遠江と様相が異なる。

宮裏遺跡において建物の構造に着目すると9世紀以降、建物規模は縮小化し、カマド設置場所により、縦長、横長を呈するものがみられるようになる。また、平面形が定まらず、竪穴建物と認定できないものも多くなる。こうした9世紀以降における建物の変化は建築構造の簡略化とともに、効率的な居住空間の確保が要因として考えられる。

土坑墓の多くは低位面で確認することができる。いずれも出土遺物が少なく帰属時期を明確に提示できない。これまでの調査成果を勘案すれば近世の土坑墓である可能性が高い。溝は高位面と低位面の境界に確認された。近世以降であると推定される。なお、本書での遺構名は7-1区との連番を付した。

SH01 宮裏遺跡3区SB12・7-1区SH01と同一の竪穴建物である。図5は7-1区で検出した遺構との合成図である（丸杉ほか2007a）。建物規模はほぼ確定し、南北推定3.6m・東西3.7mで、平面形は隅丸正方形である。建物の北壁西寄りにはカマドが設置されている。煙道の残存状況は良好で、建物の掘り方より1.3mほど延びている。床面には中央に土坑が2基確認できる。床下土坑の可能性もある。貼床・壁溝は認められない。主柱穴は宮裏遺跡3区SB12で確認した1基のみであった。

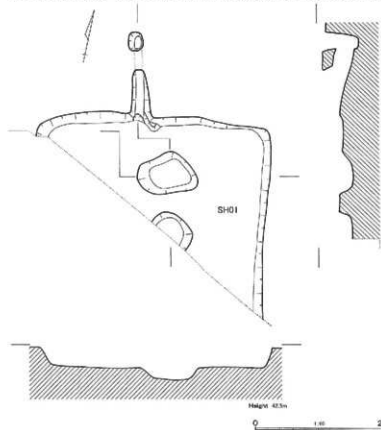


図5 SH01

出土した遺物は図9-1~5である。SH01は、8世紀後半頃の建物と判断される。



写真1 SH01カマド検出状況

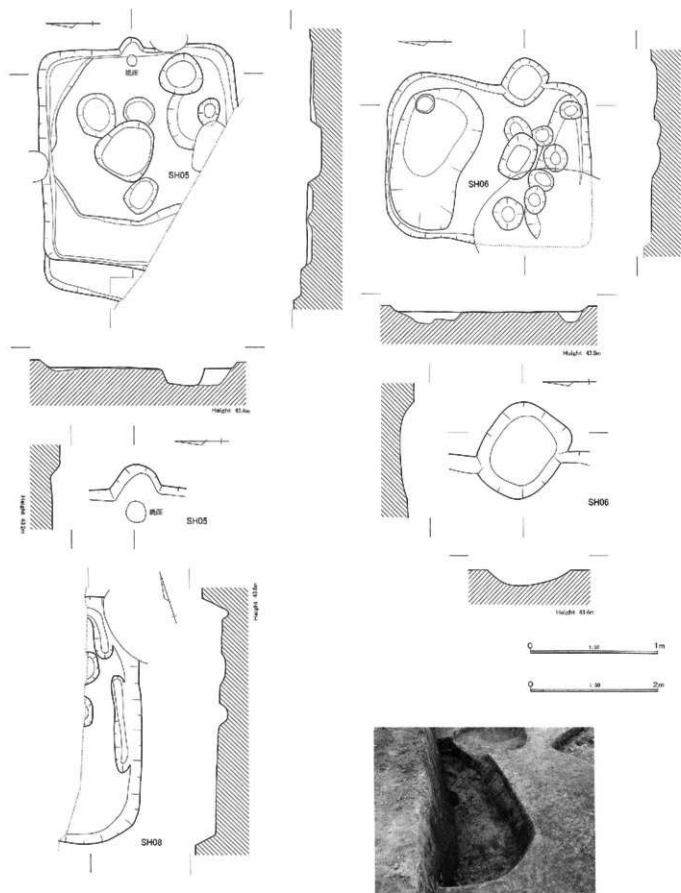


写真2 SH08検出状況

図6 SH05・SH06・SH08

SH05 宮裏遺跡3区SB9と同一の竪穴建物であり、平面形は隅丸方形を呈する。建物規模は南北3.1m・東西3.4mである。東壁中央部でやや突出する部分が認められ、床面には赤変面を検出したため、この部分にカマドが設置されたものと考えられる。カマドの袖部分は確認されていない。床面・貼床下層では小穴を確認している。下層は壁沿いに貼床掘り方を巡らし、中央を島状に掘り残している。建物西壁で一部重複する部分が検出されており、建替えが行われたものと推測される。出土遺物は図9-6～8である。帰属時期を明確にするには躊躇せざるを得ないが、暫定的に9世紀前半頃と位置づけしておく。

SH06 平面形は不整形であるが長方形を意識した竪穴建物である。建物規模は南北3.2m・東西2.6mである。東壁中央部の南側において床面をやや掘り窪めた箇所が検出されており、カマドの痕跡と捉えられる。貼床下層では多数の小穴を検出した。出土遺物は図9-9・10が該当する。明確な時期の定点を見出しがたいが、周辺の遺構の状況から9世紀後半頃と推測される。

SH07 一辺の長さ4.6m程の方形を呈する竪穴建物である。カマドは建物東壁に構築されている。煙道は中軸線上に位置するものと推定され、1.2m程延びる。袖部分の間隔は50cm程、袖の間は床面より5cm程窪んでいる。貼床は全面に行われ、下層の掘り方ではやや規模の大きな柱穴が検出された。出土遺物は図9-11～16が該当する。周辺の遺構状況・出土遺物を勘案して8世紀後葉の建物と考えられる。

SH08 平面形が隅丸方形を呈する竪穴建物と推定されるが、建物の大半は調査区外となる。建物東壁部分が検出されており、南北3.9mの規模であることが確認できる。床面には小穴・壁溝が確認されたが、貼床は認められなかった。出土遺物として明確に示し得る資料はないが、周辺の遺構状況を勘案して9世紀代の建物と捉えておきたい。

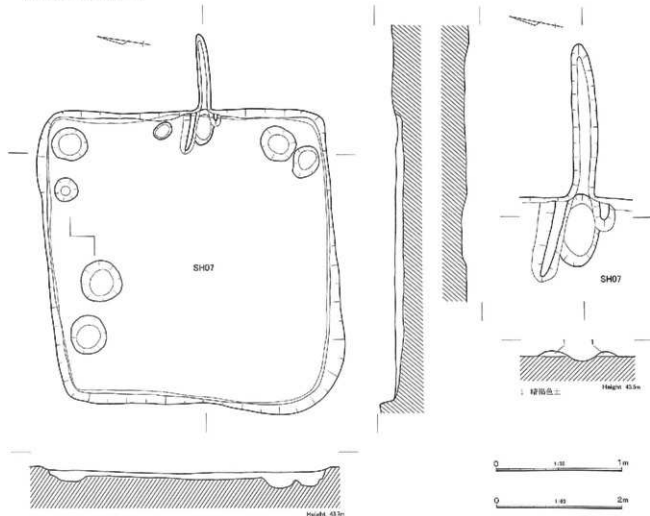


図7 SH07

土坑墓 調査区西側の高位面で6基（SK05～09・11）、調査区東側の低位面で8基（SK12～19）を検出し、比較的規模の大きな土坑墓を図示した。いずれも出土遺物は極めて少ない。図9～17に図示した灰軸陶器皿は周辺からの混入とみられる。

これまでの調査成果を勘案すれば、これらの土坑墓は近世に時期的な中心をもつものと考えられる。当調査区と隣接する宮裏遺跡3区でも低位面の土坑墓が密集して検出されていることから、土地利用に何らかの規範が存在した可能性を指摘できる。なお、調査段階ではSK10を土坑墓と認識していたが、後に攪乱であることが明らかになったため、欠番となっている。

溝 調査区西側の高位面と低位面の境で少なくとも2本の溝を確認できた。方位はやや西に傾きながら、直線的に延びる。そのうち1本は宮裏遺跡3区で検出されたSD05に接続する。古代の集落を区画する溝ではなく、近世以降の区画溝であろう。



写真3 溝完掘状況



写真4 土坑墓群

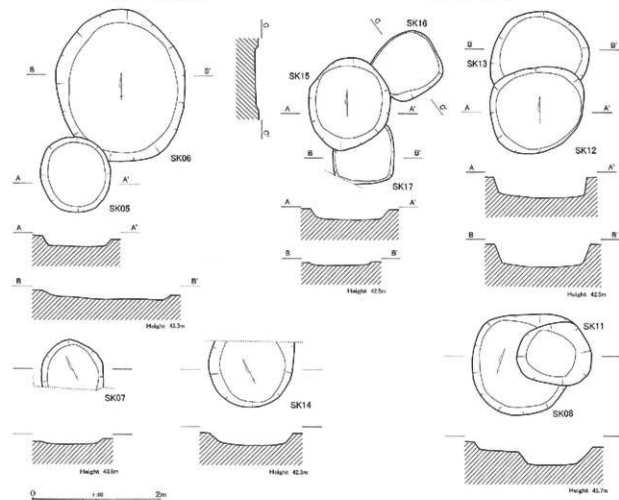


図8 土坑墓

3 出土遺物

建物内、包含層からの遺物は少なく、出土量は遺物収納箱にして2箱である。遺構出土遺物を中心に17点を図示する。古代における須恵器・土師器の器種分類は「井通道跡」(丸杉ほか2007b)に準拠した。

S H01出土遺物 1は須恵器杯B蓋である。中央がくぼむ扁平な握みがつく。天井部には回転ヘラケズリが残る。色調はやや黒味を帯びた灰色を呈する。2は土師器杯Bである。推定口径12.4cm、器高4.4cm、底径7.8cmである。高台は底部脇につく。口縁端部は横ナデにより外反する。内面は精緻で、黒色処理されており、内黒土器の可能性もある。3・4は土師器甕Aの口縁部である。3の口縁部は短く、外方へ延びる。胎土には雲母が含まれる。4は屈曲が強く、口縁部は水平に延びる。5は土師器甕Aの底部である。外面は縦位のハケが施される。底部外面にもハケの痕跡が残り、黒斑が認められる。色調は橙色である。

S H05出土遺物 6～8はいずれも土師器甕Aの口縁部である。6の口縁部は短く外反し、端部はわずかに立ち上がる。7の頸部は短く立ち上がり、口縁部は短く外反する。端部は横ナデにより立ち上がる程度である。体部と頸部の境は明瞭で、内面に接合痕が残る。8の頸部は垂直直みに立ち上がる。

S H06出土遺物 9は須恵器杯G蓋である。受け部は欠損している。色調と胎土から湖西産であろう。10は須恵器甕Bである。低い角高台がつく。外面底部、体部脇にケズリ調整が残る。

S H07出土遺物 11・12は須恵器杯B蓋である。12は推定口径17.0cmである。握みは欠損している。傘型を呈し、天井上位にはヘラケズリが残る。13は須恵器杯Aである。体部は斜め上方に直線的に延びる。胎土には金雲母や白色粒子を含む。湖西産以外の製品である可能性が高い。14はロクロを使用した土師器杯である。口径13.8cm、底径7.3cm、器高4.45cmである。底部・体部下半に回転ヘラケズリが認められる。底部に高台が貼付した痕跡は認められない。2次的に熱を受けており、焼成は不良。色調は黄褐色で、土師質である。全体的な形態としては須恵器杯Cに類似する。15は土師器甕Aである。体部の器壁は薄い。16は扇括柳葉式の鉄鍬である。周辺には高根森古墳群が存在することから古墳からの混入品であろう。

S K06出土遺物 17は黒笹90号窯式期の灰釉陶器皿である。推定口径14.6cm、器高2.95cm、底径7.4cmである。体部は直線的に延び、端部はやや横ナデにより外反する。灰釉の発色は良好で、自然釉である。内面の見込部には重ね焼き痕が残る。高台は角がとれた三角高台である。底部外面にはヘラケズリが残る。底部内面は部分的に摩滅しており、使用した痕跡がうかがえる。体部外面中位にも部分的に摩滅痕が観察された。

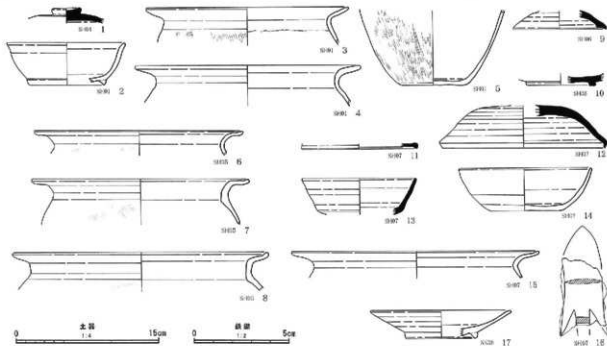


図9 出土遺物

4 まとめ

宮裏遺跡は旧石器時代から断続的に中・近世までつづく複合遺跡である。今回の調査では堅穴建物5棟、土坑墓、溝、小穴が検出され、古代と近世にかんする資料を得ることができた。報告の最後に古代における宮裏遺跡の調査成果を簡単にまとめ、今後の展望を提示する。

堅穴建物と掘立柱建物 4次におよぶ調査において宮裏遺跡では堅穴建物61棟を確認できる。単独で検出されたものは少なく、重複している建物が大半である。最初に集落が形成されるのは高位面であり、7世紀末葉から8世紀初頭である。この時期の堅穴建物は少なく、単独で立地している。建物規模は1辺5m前後と比較的大きい。

建物内の出土遺物が少量であるため、詳細な時期区分が困難であるが、8世紀後半以降、建物は低位面に展開し、建物数は増加する。ほとんどの建物は重複して検出されており、集落は10世紀まで継続する。8世紀後半段階には建物規模は1辺3～4m前後と小型化していき、カマド付設位置は1辺のどちらか一方に偏ったものがみられるようになる。また、縦長・横長の建物が存在するなど、多様化してくる傾向がある。一方、掘立柱建物は時期認定が困難であるが、少なくとも8世紀代に2棟は存在する。多数の堅穴建物に少数の掘立柱建物をもつ可能性があるとはいえ、いずれにしろ、堅穴建物が卓越した集落構造といえる。

カマドの構造 牧ノ原台地上における堅穴建物のカマドは壁から半円形もしくは三角形に張り出したものが主流を占め、静岡県内では一般的な形態である。カマドの構築材には粘土のみで構成されるものが多く認められる。東駿河・伊豆では構築材として磚や土器が多用されており、やや様相が異なる。しかし、わずかではあるが、近隣の青木原遺跡S B 3においてカマドの構築材に角磚を用いている例を確認することができる。この堅穴建物からは片面壁が出土しており、居住者の性格を考えるうえで、注意が必要であろう。

カマドの遺存状況は遺跡の立地、環境、検出面等の条件により左右されるが、今回検出されたカマドは煙道が長く、トンネル状を呈するもので、カマド構造を知るうえで貴重な調査例である。煙道の長いカマドを確認できた建物は極めて少なく、類型として富士市沢東A遺跡においてみることができる。この遺跡の煙道の長いカマドをもつ建物は7世紀前半とされる。当遺跡との直接的な関連性はうかがえないが、煙道の長いカマドは通気性を良くし、熱効率を上げるための造作であろう。

遺跡の広がり 宮裏遺跡は北側に展開する中原遺跡よりも一段低い色尾段丘全体に広がっていたと推定できる。7世紀末葉には集落が形成されるが、本格的にこの地に定着するのは8世紀後半以降である。さらに宮裏遺跡の中心は本調査区よりも東側に展開している可能性が高い。建物構成、規模、出土遺物から一般的な集落遺跡であるといえよう。

今後は宮上・青木原・中原遺跡を含めた宮上遺跡群の性格付けや竹林寺廃寺を中心とした湯日川流域遺跡群との関わりを通じて集落構成を検討する必要がある。

参考文献

- 井鍋響之ほか 2006 『宮裏II遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 藤又直人 2002 『中原遺跡 宮裏遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 久保田伸彦ほか 1997 『東A遺跡・第V地区 第4次発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 佐野一男・齊藤香織 1997 『下滝遺跡群』(財)浜松市文化協会
- 静岡県考古学会 2006 『古代の役所と寺院』
- 静岡県教育委員会 2003 『静岡県の古代寺院と官衙遺跡』
- 藤ヶ谷路人 1996 『青木原遺跡』高田市教育委員会
- 丸杉俊一郎ほか 2007 a 『宮裏遺跡II』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 丸杉俊一郎ほか 2007 b 『井通遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

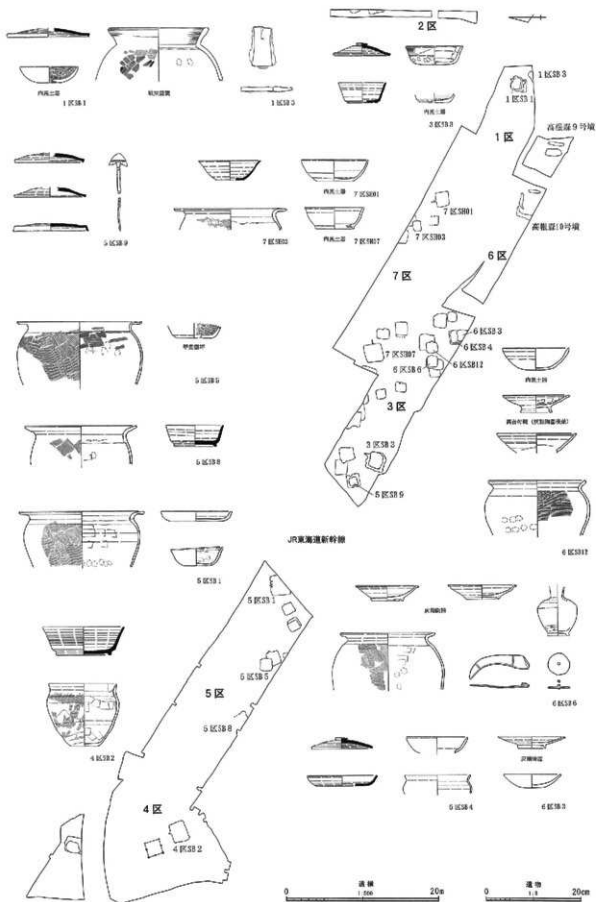


図10 宮裏遺跡の古墳時代から平安時代の様相



1 SH06床面検出状況



2 SH06完掘状況



3 SH07完掘状況



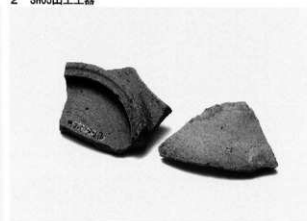
1 SH01出土土器



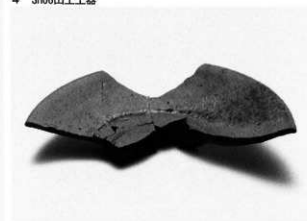
2 SH05出土土器



3 SH07出土遺物



4 SH06出土土器



5 SK06出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやうらいせき4							
書名	宮裏遺跡Ⅳ							
副題名	平成20年度（主）鳥田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	〔編集〕井鍋誉之／丸杉俊一郎							
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261（代表）							
発行年月日	2008年10月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやうらいせき 宮裏遺跡	静岡県 鳥田市 阪本	22209		世界測地系		20070514～ 20070622	313㎡	道路改築工事 平成20年度 （主）鳥田吉 田線緊急地方 道道路改築事 業に伴う埋蔵 文化財発掘調 査
				34° 48′ 32″	138° 12′ 53″			
				旧日本測地系				
				34° 48′ 20″	138° 13′ 4″			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮裏遺跡	集落	奈良時代～ 平安時代	竪穴建物5棟		灰釉陶器・土師器・須恵器・鉄鍬			
	墓地	江戸時代	土坑墓					
要約	宮裏遺跡は旧石器時代から近世にわたり断続的に集落が営まれた複合遺跡である。 今回の調査では奈良時代から平安時代にかけてカマドが良好に遺存する竪穴建物が5棟確認され た。江戸時代には土坑墓が展開する。							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第196集

宮裏遺跡Ⅳ

平成20年度 (主) 島田吉田線緊急地方道道路改築
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年10月24日

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL (054) 262-4261 (代)
FAX (054) 262-4266

印刷 松本印刷株式会社
〒420-0054 静岡県静岡市葵区南安徳1-1-18
TEL (054) 255-4862

